令和元年度第１回宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議 情報交換会
概要

区分・会場	TKP ガーデンシティ仙台勾当台　ホール１
開催日時	令和元年７月１２日（金）１３：００～１６：００
出席者数	１２７名 （連絡会議会員１５名，市区町村２９か所９５名，東北厚生局２名，県保健福祉事務所５名，県関係者２名，全国コミュニティライフサポートセンター３名，宮城県サポートセンター支援事務所１名，事務局４名）

■　各グループに入ったアドバイザーの発表・講評を集約したものです。

■　グループごとの記録用紙については別紙参照願います。なお，回収ができなかったグループがあるため，１４グループ分を添付いたします。

テーマ：関係機関（者）や所属組織との連携で工夫していること

○　組織内で共通認識を持ってもらうため，Co があえて少し引いた目線で，みんなで協力しないと地域づくり進まないと働きかけている。

○　庁舎内での連携では，地域福祉計画を切り口に，職員が集まる機会を作り，本事業を理解してもらえている。異動等で担当者が変わっても，「お宝」を理解したり，これまでの経緯を分かるようにする等，組織内で多くの理解者を作る工夫が必要。

○　企画・まちづくり・総務・生涯学習などの部署を含めて地域内勉強会を重ねてきた。

○　形の決まったものでない為，行政の上層部の理解を得ることが難しいが，理解を得られるように工夫や努力を一生懸命している。

○　地域での生活を中心にしながら，連携を深めていくと共通点が得られやすい。広報で発信することで連携が促進される。

○　関係機関とは定例会にて，進捗状況等を確認ができているが，庁内連携や所属組織内部との連携が難しいと感じている。

○　委託元と委託先の担当者同士は，情報共有をしながら連携を深めている。しかし，関係課以外に働きかけると温度差を感じる。

○　関係機関や住民に対しては，広報を活用している。読んでもらう為の工夫などについて話し合われた。

○　同じ建物内であったり，身近な場所に関係機関がいると連携しやすい。そのような場合でなくても，機会をみつけ，協働のチャンスを逃さない（関連するという理由で協働する。）

○　まちづくりの一環と捉えている。住民の悩み事は福祉分野だけではないため，他部署と共有・協働していく。

○　生活支援コーディネーター養成研修の参加者が増えると，協力者が増える。また，管理者に研修に参加してもらえると，事業の理解が進む。

○　行政が見える化，見せる化する工夫も必要。

テーマ：地域に入りこむ工夫やコツ

○　社協と行政では，多少のわだかまりは持っている。しかし以前と比較し，間違いなく会議の回数が増え，連携が取れやすい関係になってきている。

○　参加してまずは地域に混ざることが重要。しかし世代間の違い，若い方と高齢者の感覚の違い，地域特性などを加味し，踏まえた上で地域に入って行くことも重要。

○　民生委員や自治会長に繋いでもらう。自分の担当ではない地域にも紹介してもらう。

○　事業に携わる方は，地域性を見極めている。例えば島の住民と内陸部の住民の感覚は違っており，丁寧に寄り添っていることがわかった。

○　住民と付き合うには，覚悟が必要。（アオカビの生えた干し柿を差し出された例を用いて）。住民と向き合っているのだと実感した。
○　事業に携わって１年目の方は，使われる言葉に対し，カタカナが多い，わかりづらい表現が多いということに気が付いた。慣れてくると，当然に使ってしまうが，当事者目線で気付けると良い。
○　「すっかける（声をかける）」ことが地域に入るコツ。声をかけると，なんらかの反応がある。また，日常の生活に関係する話題から話を繋げていくことが大事。
○　地域特性があり，区長にまず挨拶をすることが地域の慣習というところや，そうではないところもある。郷に入れば郷に従うことが必要。
○　ある生活支援コーディネーターは，自分のことを知らない町民はいないといっていた。
○　住民には，人の為ではなく，自分の為にやってみませんかと話している。
○　「サロン」とは呼ばれたくないようなお茶会などの小さな集まりでは，買物の送迎をするなど，普段の付き合いの中で行っている場合もある。そのような場には，あまり入り込まないようにしている。
○　サロンに自分のこどもを連れて行くと高齢者の反応も良く一石二鳥になっている。
○　その地区で意思決定のプロセスがある。意思決定のプロセスをきちんと踏んだ上で情報発信することを忘れてはいけない。
○　地域特性がかなりあり，富裕層多い地域では，お金で問題が解決できる方もいて，つながりではなく，自分の暮らしの中に他人が入ってこないような暮らし方を選ぶ方もいる。

テーマ：協議体の運営で工夫していること

○　本事業が始まる前から，社会福祉協議会は地域のネットワーク（地域推進委員，老人クラブ事務局，民生委員，区長等）を持っているという強みがある。民生委員へのアプローチや会話のきっかけなどが共有できた。
○　圏域を大切にしながらワイワイガヤガヤできる環境づくりにみんな苦労している。女川町は第１層協議体を毎年テーマや委員を変えて開催しており，大変難しいやり方だが，チャレンジしている様子が伺えた。
○　地域福祉計画や地域福祉活動計画を策定するための会議になりがち。住民の声が反映できるよう，地域の特性を丁寧に調べながら進めるよう工夫している。
○　第１層協議体と第２層協議体をどのように連携していくか。
○　子どもも入ってもらえるような協議体に育てていきたい。※まずは，できることをできる範囲で行うことが大切。
○　協議体という名称が良くない。丸森町では「ささやき会議」という名前をつけている。
○　七ヶ浜町では，ＰＲ動画をつくっている。紹介するときの伝え方はとても重要。
○　企業をどのように巻き込んでいくか。活動団体がやりたいということを引き出してマッチングすることもできる。
○　グループワークを最初は行っていたが，中々続かない。今は意見交換や情報共有の場になっており，地域づくりの一歩手前のネットワークづくりに取り組んでいる。
○　協議体の運営については，協議体メンバーの活動の見える化，見せる化，寸劇の役をやってもらったり，ホワイトボードを使い協議の話を見える化する。養成研修への参加者を増やす。

その他（アドバイザーの講評など）

○　住民から拒否反応を受けてしまうことだったり，サロンの活動が土曜日や日曜日，夜だったりと辛いこともある。しかし，反応の良い地区を取っ掛かりにしたり，隣の席から情報を少しずつ得たり，自分たちの出来る所から進めていることが共通している。
○　人間味があふれる，人間力が際立った皆さん。生活支援コーディネーターのみならず，行政や包括の方も，地域で仕事をして下さっている皆さんが地域で可愛がられたり，頼られている様子が伺

えた。同時に，みなさんのキャラクターや人間味を生かし，地域の中で仕事をしていく仕組みや事業はどのようにしていったらよいだろうか。人間味が地域で活かされていってほしいと感じた。

○　行政が括ったエリアの中で進めていくのではなく，生活に根差したエリアでの区切り方がやりやすいのではないかと感じた。

○　被災地では，被災によって自治組織が弱体化したが，身近な生活圏域の中で，非常に丁寧にヒヤリングをしている。それを積み重ね，第２層協議体につなげている。被災地に限らず，できるだけきめ細かく，いろいろな所に入っていて丁寧にそれをすくあげている。

○　「焦ってはいけない」,「住民が決めることだから住民を信じよう，住民の力を信じよう」という言葉を聞くと，この事業をやっていて良かったと救われた感じがある。
その一方で，移動の足の問題があり，タクシー券を配ったという話を聞いた。サービスを出すと，足りないという声が住民から出てくるそう。しかし，実際調べてみると効果的に使われていないという話だった。古くから助けたり，助けられたりの活動を重視し，これまで，社会やコミュニティを作り，このような原理や価値を社会のすみずみまで行き渡らせて，人間関係を豊かにしてきたと思う。ややもすると過剰なサービス提供によって，社会の基本にある原理や価値を，ことごとく，サービスとして受け取ったり，お金に置き換えてしまうと，我々が生活している社会やコミュニティを壊してしまうことになるのだと，タクシー券の話を聞き，感じざるを得なかった。

○　多様性の中に本事業がある為，隣の人の話を聞いて，すぐ役に立つものではなく，自分のところにどう落としていくかという姿勢があった。

○　できるだけ自分をPRしなければならないので，よく覚えてもらえるような努力をしている。参加者として参加していることもある。

○　ある区の定例会では，地域で出会った人の発表会をしている。専門職同士で共有し，担当者が変わっても，地域にいる人の情報を伝えていく取組みであり，専門職内協議体のようなものがあってもいい。

○　サロン等が終わった後の反省会（お茶飲み）をする時に，地域の話がでてくるが，それは第３層協議体に相当される。生活支援コーディネーターが，さまざまな集まりに参加することが，有る意味で協議体になり，そのような関わり方もある。続けていると柔軟になってくるし，アイディアも多くでてくる。アイディアが蓄積される関わりが重要。

○　福祉系の機関は連携することが得意ではない。それを前提に，どのような形で連携させる為には，住民の力を借りる。協議体は住民の意思決定機関だと思い，これからの研修，生活ＣＯを養成するということ，地域力を高める研修として，膨らませる形にしていく。ことが，住民みんなでやっていきたい。